

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

——— 生きるとは分かち合うこと、弱者と

PHD LETTER
Volume
145
2020.12

公益財団法人PHD協会
2020年度会報145号

サンガイ ジウナコ ラギ

सँगै जीवनको लागि

みんなで生きるために



REPORT

ネパール「ダリット」コミュニティ生活支援プロジェクト

PHD LETTER Volume.145

Contents

P.2 続・各国のコロナ事情

P.3-4 PHD Movement vol.28

コロナ禍におけるPHD協会の活動 途中経過報告

～ネパールでのダリット支援と神戸での元技能実習生の受け入れ事例～

P.5-8 ネパール「ダリット」コミュニティ生活支援プロジェクト

P.9-10 アウトリーチ型 在日外国人支援事業

P.11 国際協力・交流シェアハウス「みんなのいえ」始動

P.12 寄稿「大丈夫。あなたの声を頼りにして」

P.13 日々是東奔西走

ZERO PC

P.14 PHD活動紹介 2020年7月～10月

P.15 PHDNews

表紙写真/ネパール・ジトゥルボカリ村、ハラバラメンバー (撮影：古屋祐輔)

兵庫国際村～ブラジル、アジア留学生と共に～

温故知新 岩村語録 その20

兵庫国際村は「PHD 設立構想資料」として岩村先生が1981年4月に起草し、後に初代理事長となる今井鎮雄先生に送られた手紙に記されていたものである。

兵庫国際村 International Village

(中略) 兵庫国際村がPHD計画の拠点となり、既に姉妹関係を結んで居るブラジルを始め、発展途上国特にアジアとの交流を深め、日本に於ける兵庫県の特色を高めることと信じる。

- 1) 兵庫県内の山地に、10世帯の農業経営が成り立つ位の敷地を確保し、
- 2) ブラジルやアジアを経験した日本人PHD達がそこに入植して、出来る丈発展途上国の村に近い簡素な小型モデル村をつくる。

(中略)

- ① PHD訓練の初めのオリエンテーションと最後のまとめを、この村のPHD農業経営者宅に民泊して行う。
- ② 兵庫県に在住するアジア留学生を招き、日本人学生と一緒に、この村のPHD農業経営者宅に民泊させ、この村内及び近隣村で、PHDワークキャンプを行う。

今回、コロナ禍で急遽留学生支援を実施したが、岩村先生の当初構想にも留学生との協働、アジアとの交流の拠点づくりが記されている。遅まきではあるが、新事務所を交流の拠点として県内の留学生との共生も深めていきたい。(さ)



PEACE, HEALTH&HUMAN DEVELOPMENT
公益財団法人PHD協会

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげ、平和(Peace)と健康(Health)を担う人づくり(Human Development)をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年に今井鎮雄(初代PHD協会理事長)と共にPHD協会を設立しました。

PHD LETTER 145号

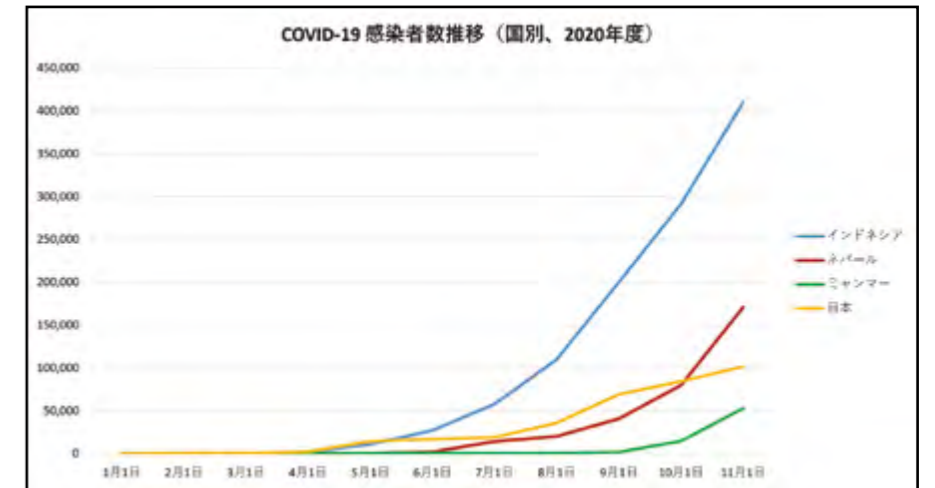
発行：公益財団法人PHD協会
住所：〒653-0836 神戸市長田区 神楽町3-7-4
電話：078-414-7750
FAX：078-414-7611
E-mail：info@phd-kobe.org
URL：http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座：公益財団法人PHD協会 01110-6-29688

PHD 続・各国のコロナ事情

研修担当 山本 健太郎=文

終息はまだ見通せず、世界中で猛威を振るう新型コロナウイルス。

研修生の出身国は今、どのような状況なのだろう。前号に引き続き、夏以降の各国の感染状況と対策を追跡した。



Googleデータを元に作成：PHD協会

インドネシア



感染者数 463,007人 (11月15日時点)

春先から感染が広がっていた都市部のジャカルタ州やジャワ州では、継続的に大規模社会制限(PSBB)を実施。指定11業種(保健衛生や金融、建設、情報技術等)以外の目的での外出を制限したが、現在も感染拡大の勢いは衰えを見せていない。研修生が生活するタランバブンゴ地域では、農業やモスクでのお祈りは平常通りできるようになったが、学校教育やビジネスには多大な影響が出ている。またマスク着用やソーシャルディスタンス等の感染対策を怠った者には厳しい罰則が課される。

6/26 新型コロナウイルスに係るバリ州出入域措置

- 7/3 国内移動に必要な新型コロナウイルス検査証明書の有効期間の緩和
- 7/8 バリ島・新時代における生活秩序のプロトコル
- 7/17 首都ジャカルタにおける大規模社会制限の延長
- 7/20 首都ジャカルタの出入域に対する規制の撤廃
- 7/30 バリ州政府による国内観光客の受け入れ再開
- 9/8 バンテン州における大規模社会制限の州全域への拡大
- 9/18 バリ州における新型コロナウイルス感染防止対策の強化(バリ州知事発関係各機関宛宛章)
- 10/11 特定の目的のために訪問する外国人への査証及び滞在許可発給を一部再開

ネパール



感染者数 208,299人 (11月15日時点)

感染拡大が落ち着きを見せた7月中旬にロックダウンを解除。だが、特に人口密度が高いカトマンズ盆地内3郡で感染者が増加したため、人々の移動制限や感染予防策の徹底を国民に呼びかけた。車両の通行規制も開始し、ナンバープレートの偶数・奇数によって運行できる日を制限した。研修生の村では、田畑がない人やコロナで仕事を失った人々の生活が苦しい状況下にある。10月には例年より規模を縮小しつつも、各地で*ダサインのお祭りが行われた。

*ダサイン：ネパールで毎年10月頃に、善が悪に勝つことを祝うために行われるお祭り(約15日間続く)。

- 6/15 ロックダウン緩和の第一段階 入国管理局の再開
- 7/22 ロックダウンの解除
- 8/10 入国管理局による全てのビザ発給禁止
- 8/20 カトマンズ盆地内3郡における新たな行動規制開始
- 9/11 入国管理局のビザに関するサービスの再開
- 9/17 ダサイン祭りに向け長距離バスと国内線フライトの運行再開
- 9/29 車両の偶奇ルールの取り締まり強化
- 10/17 宗教施設再開

ミャンマー



感染者数 68,011人 (11月15日時点)

夏場も陸・水・空路による外国人の入国厳格化を徹底。都市部でも、感染予防に努めながら、少しずつコロナ禍の生活様式が確立されつつあった。しかし、8月下旬のラカイン州シットウエでの感染拡大を皮切りに、再び厳しい感染拡大防止措置を取らざるをえない状況になった。特に9月以降の感染拡大の速さは脅威的である。研修生たちの村では、手洗いやマスクなど感染予防は習慣化されているが、農業以外の仕事はほとんど実施できない状態で、人々の生活も逼迫している。

- 6/9 外国人の入国規則の厳格化(陰性証明書、推薦書、空港での隔離等)
- 6/13 入国制限措置の継続、再延長
- 7/14 各種制限措置の延長(国民への指示、注意喚起、通達)
- 7/30 国際旅客便の着陸禁止措置の継続、再延長
- 8/21 ラカイン州シットウエ地区における自宅待機措置(州内の感染者増大)
- 9/3 首都ネーピードーへの入域規制の強化
- 9/8 マンダレー地域への入域規制の強化
- 9/10 ヤンゴン地域21地区における自宅待機措置
- 9/11 ヤンゴン地域からの出域制限措置

事務局長 坂西卓郎 = 文
～分かち合い実践録～

コロナ禍におけるPHD協会の活動 経過報告 ～ネパールでのダリット支援と神戸での元技能実習生の受け入れ事例～

ステイホームできない脆弱層への支援

前号でもご報告させていただいたように支援者の皆様から多大なご支援をいただき、当会は活動を継続することができている。今年ほど人の温かさを感じた年はない。改めて皆様に感謝申し上げたい。

同じく前号で「岩村先生がご存命なら今何をする？」という問いかけをした。研修生の招聘ができない中で何をするのか、すべきなのか。また支援者の皆様の想いに応える活動を展開したい。そんな想いで取り組んできた半年の報告をさせていただきたい。

半年の取り組みを表現すると「ステイホームできない人たちへの支援」となる。現状では次の2つ。

1. 被差別カースト・ダリットの方たちへの支援

被差別カーストであるダリットの方たちは田畑を持っていないケースも多く、出稼ぎや日雇い仕事が主な収入源であった。コロナ禍でそれらがなくなり、かといって自給もできない。突如生活の糧を奪われ、日々の食事にも困ようになったダリットの方たち。ネパールでは10月に収穫期を迎えるということで、まずはそこまで命をつなぐ支援を実施した。詳細はP5-8をご参照いただきたい。



10月収穫前のお祭り「ダサイン」を祝った

2. コロナ禍で困窮している在留外国人の支援

話は前後するが、当会は6月に神戸市中央区から長田区へ移転した。コロナ禍の中での移転のため、オープンハウス等もできなかった。この場を借りて改めて移転の目的をご報告させていただきたい。長田区への移転の目的は大きく2つあった。

- ① 研修事業の運営の安定化
- ② 難民支援としてシェアハウスの開設

しかしながら、②に関してはコロナ禍を受けて、難民の方に

限らず広く困窮している外国人を受け入れることとなった。

長田区は前事務所から距離にして5kmほど離れているに過ぎないが、1980年代にはインドシナ難民を受け入れてきた歴史があり、今も外国籍の方が多地域だ。(2019年12月末95,220名中7,143名 約7.5% / 長田区)

P9-10にアウトリーチ型支援として留学生への支援活動報告をしているので、ここではシェアハウス事業の報告として、10月に受け入れたベトナム人チュオンさんのケースを紹介したい。

技能実習生として過酷な労働に従事

チュオンさんは技能実習生として約4年前に来日。北海道で約1年半、水産加工の研修に従事していたそうだ。しかしながら、研修という名の過酷な労働だったようで、朝早くから漁船で網を引き、さらには社長からは暴行も受けていたという。

その後、ブローカーを頼って、東北、中部と移動しながら、ソーラーパネル製造の仕事をしていっていたらしい。ブローカーは同じベトナム人だったようだが、給与の不当搾取を受けたそうだ。最終的には兵庫県内のとある工場働いていたようだが、過酷な労働やストレスがたたり重い結核を発症。法定伝染病ということで、行政や社協、保健師さんが動いてくれ、感染症対応ができる神戸の病院に隔離されたのが6月のこと。がりがりに痩せていたようで、排菌が収まり退院ができるまでに4ヶ月以上かかった。チュオンさんを担当していた保健師さん曰く「神戸は結核が多いが、若い年代の患者のほとんどは外国人」という。

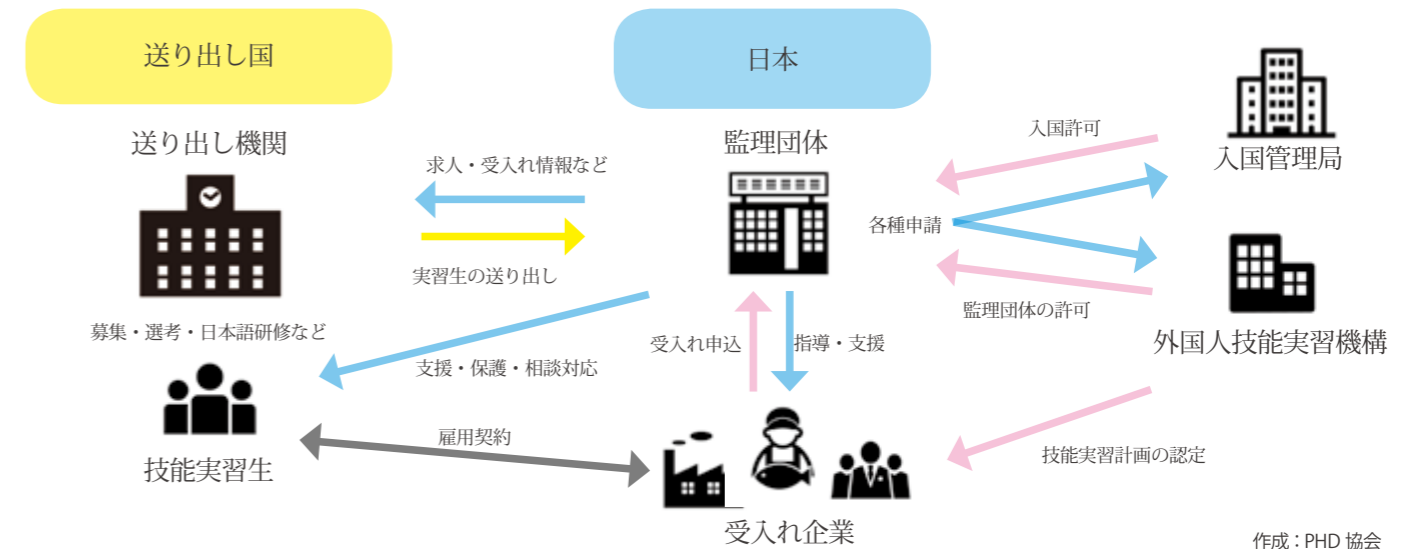
行政との連携で、当会のシェアハウスへ

PHD協会に連絡があったのは10月の半ば。「NGO神戸外国人救援ネット」と兵庫県役所からで、退院のタイミングであった。担当の方曰く、「退院後、公的サービスでは行き場がない」とのことだった。チュオンさんはベトナムへの帰国を望んでいたが、コロナ禍で帰国便も順番待ち。ベトナム大使館曰く、搭乗が2週間後になるか1ヶ月後になるかわからないチュオンさんは入院中に仕事も住居も失っており、行き場がなかった。所持金も少ないが、在留資格上も新しく仕事に就くこともできない。そこで10月21日にPHD協会のシェアハウスに入居し、生活面や入管での手続きなどを支援した。

出会ったチュオンさんは実直でよく気が付く好青年であっ

外国人技能実習制度とは。

日本の企業などで、技能実習生として外国人を受け入れ、働きながら習得した技術や知識を母国の発展に活かしてもらう目的の制度です。



作成：PHD協会

た。ただ約4年間日本にいたにしては日本語の会話が難しく、今まで孤独の中で重労働に従事してきたことが窺えた。ささやかなウェルカムパーティーをした際には笑顔を見せてくれ、ベトナム語と日本語で楽しいひと時を持つことができた。

そして、当初はいつになるかわからないと言われていた帰国が突如10月29日に決まり、成田から無事に帰国の途につくことができた。借金が残っているようだが、ベトナムで幸せを取り戻すことを願ってやまない。



西神西医療センターにて(左から2人目/保健師の福田さん、3人目/チュオンさん)

チュオンさんのメッセージから考える外国人との共生

「正直日本での4年間はつらいこと、大変なことの方が多かったです。でも最後にPHDのみなさんのような良い人たちに出会うことができ本当に嬉しかったです。心からありがとうございました。」

出国の際にチュオンさんが語ってくれた。彼の受け入れに関しては当会だけでなく、区役所や社協、NGOの方々も動いてくれたおかげで実現した。公的サービスの隙間を埋めたとも言えるし、市民社会の協働の結果とも言える。その意味ではなにかの貢献ができたという思いはある。

ただ個人的には最初の一文が胸にささる。せっかく日本を選んで海を渡ってくれた人たちに理不尽な辛さを経験してもらいたくない。安い労働力として使い捨てるのではなく、私たちの隣人として、共に生きることでできる社会をつくりたいと心から思う。

同時に私たちのステイホームを外国人労働者の方々が支えてくれている事実からも目を背けてはならないと思う。例えば宅配業に従事している外国人は多く - 中にはグレーゾーンで働くことを余儀なくされている人もいる -。それなくして家に居ながら必要なものを受け取るという「新しい生活様式」は成立するのだろうか。

「生きることは分かち合うこと」、岩村先生のメッセージの体現に向けて、当会は今後何をしていくべきなのか。まずは本事例のように長田の地で困窮している方たちと共に生きることから歩みを始めていきたい。

REPORT

ネパール「ダリット」コミュニティ生活支援プロジェクト



古屋祐輔 = 撮影 山本 健太郎 = 文

サビナさん、スシラさんからの声

P2に記載の通り、ネパールでは長きにわたるロックダウンにより、国内の経済は停滞し、職を失う人が激増しました。政府は経済活動を段階的に再開するため、6月中旬に規制緩和しましたが、これにより首都カトマンズや隣国インド、中東などの出稼ぎ先で職を失った人たちが自分たちの村々へ帰還し、感染爆発が起きてしまいました。(感染者数 208,299 名、死者数 1,221 名、2020 年 11 月 15 日時点)

ネパールの元研修生サビナ・ビシケ・ラムテルさん(2018年度)とスシラ・バセル・サルキさん(2019年度)から助けを求める声が届いたのは、そんな矢先のことです。

「今、村の人たちはコロナで仕事がなくなりました。私たちはまだ大丈夫ですけれど、収入も減って、食べるものがない人たちがたくさんいます。」

彼女たちの地域には、カースト制度の最下層にあたる「ダリット」と呼ばれる人が数多く暮らしています。しかし、そのほとんどが土地や田畑を持たない世帯で、新型コロナウイルス感染拡大の影響で職も失いました。村の人々は貧しさを抱えたまま、感染の恐怖に怯えていたのです。

村の課題と状況

サビナさんとスシラさんに村の現状に関して聞くと、主に2つの課題がありました。

- 1) 生活困窮による食糧難。職がなく、収入もないため、毎日を凌ぐ食べ物が何もない。
- 2) 村の人たちの新型コロナウイルスに対する知識が不足していること。この感染症の特徴や予防法について知らないために、感染のリスクが大きい。

新型コロナウイルス感染拡大がいつまで続くか見えない中で、村の食糧難の問題は特に深刻でした。サビナさん

やスシラさんも日々連絡を取る度に、「村の人たちの生活がどんどん大変になっている。自分たちに何もできないのがくやしい。私たちから分けてあげる食べ物さえあれば村のみんなを助けることができるのに。本当の気持ちは、私たちにも何かできるサポートがしたいです。」と何度も語っていました。

当時は、田畑で栽培される米やとうもろこしも収穫期ではなかったため、彼女たちも自分たちの家族や生活を守ることで精一杯の状態だったのです。ただ、周りと同じように苦しい状態にありながら、利他的に考えられる2人には心打たれました。

その後もやり取りを重ね、彼女たちの切なる思いにも応えるべく、「ダリットコミュニティへの食糧配給及び感染症拡大防止のための啓発活動」というプロジェクトを企画しました。

※このプロジェクトは、公益財団法人庭野平和財団の助成を受託して実施しました。

計画づくり

岩村先生の提唱にありますが、村の人たち(ここでいう受益者)の“自発、自主、自立”を促すためには、「物」「金」中心の一時的な援助を越えた草の根レベルの人材交流・育成が不可欠です。今回のプロジェクトも、緊急的な食糧配給でダリットの人たちの命を繋ぐための生活支援に、感染症拡大防止の啓発活動という研修の側面を加えることで村の人たちの学びやその実践にも寄与したいという考えがありました。

(プロジェクト目的)

- 1) 食糧配給：新型コロナウイルス感染拡大の影響で飢餓の危機に直面する「ダリット」や困窮している人々の健康と命を守る。
- 2) 感染症拡大防止のための啓発活動：貧困世帯に対して、手洗いやマスク着用等の感染予防対策について説明を行い、村の人たちが感染予防のための正しい知識を身に着ける。

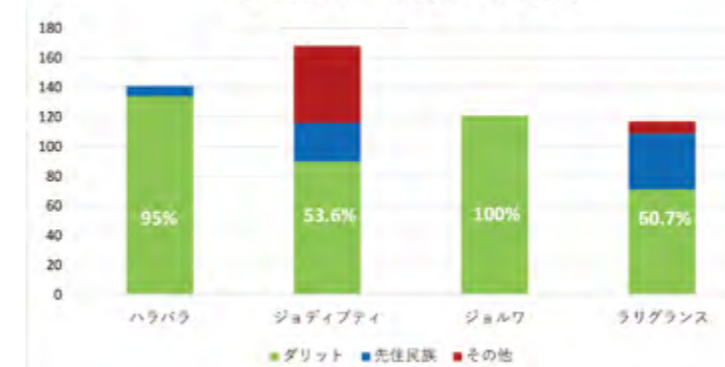
プロジェクトを計画する上で、支援世帯の選定や活動内容の詳細は重要でした。サビナさん、スシラさんだけでなく、ネパール現地カウンターパート*SSSへ協力依頼をし、詳細な事業計画を一緒に練っていきました。

下記の表の通り、私たちはダリットや貧困世帯が多く住んでいるマンダンドゥプール地域にある4つの女性グループとその家族へのサポートを決定しました。支援対象者は計547人、そのうちダリット階層に属するのは416人と全体の約76%を占めます。特に、ひとり親世帯、多子世帯、土地なし世帯、高齢者世帯といった最貧困層が大多数を占めています。彼らのような社会的に最も脆弱な立場にある人々の生活が守られ、現状の貧困状態からの脱却が急務でした。

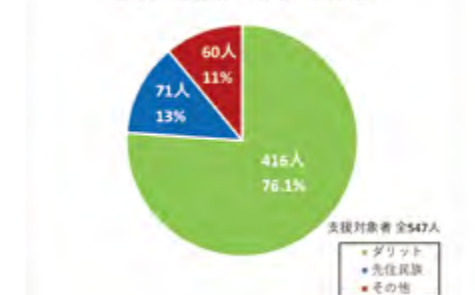
* SSS(サマ・セフ・サムハ):第1期研修生パルト・ピスタさんが立ちあげたNGO。地域でクリニック運営やダリットコミュニティの生活支援、教育事業などを中心に行う。

No.	グループ名	地域	グループメンバー数	世帯数	総人数
1	ハラバラ 女性グループ (サビナさん、スシラさん所属)	ジトゥルポカリ村	34	32	141
2	ジョディプティ 女性グループ	バハテゴン村	32	32	168
3	ジョルワ 女性グループ	ラトマタ村	28	27	121
4	ラリグラス 女性グループ	パウワ村	28	28	117
合計			122	119	547

各女性グループのカースト内訳



全体に占めるダリットの割合



活動実施

食糧・衛生用品の配給活動については、サビナさん、スシラさんが中心となり、支援対象者リストの作成、食糧・物資の買い出し、仕分け、配給作業を進めてくれました。そして、今年度研修生として来日する予定だったアシカさん（ジョディプティ所属）も活動に参加し、村のために率先して動いてく

れました。彼女自身も、サビナさんやスシラさんと一緒に頑張ることで、自身の村や人々のことをより大切に考えるようになったそうです。そして、PHD 研修生として早く来日したい思いが一層強くなったと語っていました。

感染症拡大防止のための啓発活動では、SSS が運営するクリニックで助産師として働いている元研修生のウルミラさん（2010 年度）が協力してくれました。

4つの女性グループの人たちに新型コロナウイルスの特性、手洗いや消毒といった日頃の感染症対策がいかに大切かを指導してもらいました。現在、村の人たちはこれまで以上に日常的に手洗いや消毒に取り組んでいるようです。今回の啓発活動が、参加者やその家族の行動変容につながり、コミュニティ内で予防習慣が浸透してきているのは大変嬉しいことです。

グループ名	感染防止啓発活動①	衛生用品食糧配給	感染防止啓発活動②	フォローアップトレーニング	実施場所
ハラバラ	7/19	7/22	7/27	10/4	ジトウルボカリ村 事務所
ジョディプティ	7/15	7/20	7/30	10/5	バハテゴン村 事務所
ジョルフ	7/18	7/22	7/26	10/4	ジトウルボカリ村 事務所
ラリグラス	7/14	7/20	7/29	10/5	女性メンバーの家

食糧・衛生用品配給

119 世帯

総額 350,987 NR
(日本円で約 317,500 円)

- 1 セット / 世帯
- 5 人以内の家族
米 30kg、レンズ豆 2kg、食用油 2L、塩 2 パック、消毒液 1 ボトル、タオル 1 枚、石鹼 1 個、バケツ 1 つ
 - 6 人以上の家族
上記に加えて米 + 5kg、レンズ豆 + 1kg、食用油 + 1L、塩 + 1 パック、石鹼 + 1 個



感染症拡大防止のための啓発活動
(各女性グループのメンバーを対象)

総額 41,895NR
(日本円で約 37,890 円)

- 公衆衛生指導（オリエンテーション）
- 新型コロナウイルスの症状と危険性
- 手洗いや消毒、マスク着用の習慣化
- 社会的距離（ソーシャルディスタンス）
- 感染時の対処



プロジェクトを終えたサビナさん、スシラさん、アシカさんのコメントをご紹介します。



左からスシラさん、アシカさん、サビナさん

サビナ（2018 年度）
村がとても困ったときに私たちの声を聞いてくれてありがとうございます。助け合いがあるから私たちの気持ちも強くなりますし、いつも頑張ろうと思います。本当に心からありがとうございます。ありがとうございました。

スシラ（2019 年度）
これからも私たちは村の人たちと心と心を合わせて、諦めない気持ちを持って頑張っていきます。皆さんのサポート、本当にありがとうございます。

アシカ（次期研修生）
皆さんからの支援は、村でもとても大きな力になっています。私も PHD 研修生として日本に行ける日を楽しみにしています。

「共に生きる」の実践

今回のプロジェクトは、現地にいるサビナさんとスシラさんの思いがあって始まりました。

日本で経験を積んだ元研修生の彼女たち自身が今何ができるかを考え、率先して動く姿が印象的でした。どれだけ困難な状況下であっても、より弱い立場にいる人々に寄り添い、状況を打開しようとする 2 人の姿に、岩村先生の「生きるとは分かち合うこと、弱者と」という理念を重ね合わせました。

現在も彼女たちは村を回りながら地域の生活状況や感染症予防の把握とフォローアップを行っています。これからも元研修生たちの声を大切にし、対話を重ねながら、現地の刻々と変わる状況やニーズに柔軟に対応していきたいと思っています。



REPORT

アウトリーチ型 在日外国人生活支援事業

当プロジェクトの中の留学生支援活動は、公益財団法人神戸国際協力交流センター（KIC）助成を受託して実施しています。

山本 健太郎 =文

コロナ禍、私たちにできること

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、設立以来初の研修生招聘ができない一年。研修事業を実施できない中、「私たちに何ができるか。今だからこそ人や社会にとって必要とされている活動を」そう問い続けた日々でした。

一つの転機は6月の長田への事務所移転。当時は緊急事態宣言下で、外に出て人に会うということが困難でした。そんな中、雇止めや帰国困難のまま困窮下にある在日外国人についてニュース等を通して見聞きする機会が増えました。

同じ頃、私たちは来日したばかりのミャンマー人の留学生3人に会いました。彼女たちは日本語もままならない状態で、仕事につけず家賃や授業料の支払いに追われて苦しんでいました。毎日の食べ物を買う事も難しい3人に急遽食糧支援を行いました。

「私たちは誰に助けを求めているのかわからなかった。本当にありがとうございました。」

そう語る彼女たちの姿に、外国人として日本でコロナ禍を生きる過酷さを感じずにはいられませんでした。

「彼女たちと同じように、今支援や情報

にアクセスできずにいる多くの外国人の方たちは、毎日をどう乗り越えているのだろうか。苦しみの最中にある人たちに寄り添いたい」そんな思いが芽生えました。

アウトリーチ

コロナ禍の真ただ中で、助けを必要としている外国人と深くつながることは簡単ではありません。一方で直接の出会いを介さずに当事者のことを理解することはできません。彼らの実状を知るためには、出会いの中でひとりひとりの「声」を聞いて少しずつつながっていくほかに、PHD協会は今までも草の根交流を大切にして歩んできたのだから。

その思いのもと、アウトリーチ型 在日外国人生活支援事業を始動しました。

アウトリーチとは、直訳すると「外に手を伸ばす」ことを意味しますが、福祉分野では「支援が必要であるにもかかわらず届いていない人に対し、行政や支援機関などが積極的に働きかけて情報・支援を届けるプロセス」と定義されています。PHD式に言うならば、長田という地域を中心に、在日外国人が利用する日常生活の場に足を運び、彼らの生活実態やニーズを把握しながら必要なサポートを、

ということです。日常生活の場とは、外国人の方々が利用する飲食店や宗教施設、語学学校やNGOを指します。この活動の趣旨として、①困窮下にある在日外国人の方々に支え安心安全な日常を守ること ②地域在住の外国人の方々と出会い、関わりを持つことを掲げました。

つながる中で見えたこと

自粛期間が明けて少し落ち着いた7月上旬、私たちは活動を本格的に開始しました。神戸や長田の飲食店や学校関係を訪問し、留学生や技能実習生をはじめとする多くの人たちと出会うことができました。その中で在日外国人が抱える生活課題を知る機会をえました。勤務先からの不当解雇やいじめ、嫌がらせなど、様々な事情で苦しんでいる人たちの声を聞きました。チュオンさんの事例（P3-4）のように、勤務先での暴力などに苦しみ、逃げ場のない人も多くいます。私たちは当事者に対して直接ヒアリングを行い、つながる中でそれぞれの思いやニーズを理解しようと努めました。そして、彼らのコロナ禍における生活面の課題をサポートするために、必要な食料・日用品の配給や当会事務所の3階を緊急的な住まいとして提供しました。

主な訪問先（神戸・長田地域を中心に計60カ所、2020年11月15日時点）

飲食店（34カ所）	食品市場（8カ所）	寺・教会・モスク（3カ所）	大学・専門学校・語学学校（7カ所）
アジア食堂バル SALA	Kobe Halal Food	神戸ムスリムモスク	神楽日本語学院
ミャンマーカレー TeTe	Kobe Grocers	Chua Hoa Lac(ベトナム仏教寺)	神戸ワールド学院
ベトナム専門料理店 Pho 89	北野グロサリーズ など	カトリック神戸中央教会 など	神戸外語教育学院
39 SAIGON			国際語学学院 など
梅花（メイファ）			
クワンチャイ			
Bumbu Kitchen			
パントリーマーケット など			
	NGO・NPO（5カ所）		
	神戸コア教育文化センター		
	Free Help		
	NGO 神戸外国人救援ネット など		
			その他（コンビニ、雑貨屋 など） 3カ所

アウトリーチ活動で見聞きした在日外国人の抱えるコロナ禍の課題

- 突然の解雇や雇止め、労働時間削減（留学生、技能実習生）
- 国際線が飛ばず、帰国できない（留学生、一般就労者）
- 勤務先でのいじめや差別（技能実習生）
- 自身の飲食店に客が入らず運営困難（長期就労者）
- 劣悪な労働環境下での傷病（留学生、技能実習生）
- 入国管理局での不当な扱い（難民申請者）
- 来日直後で仕事を見つけられない（留学生）

支援実績（2020年11月15日時点）

- 生活相談（計20人）
- 食料・日用品配給（計14人、うち中国9人、ミャンマー3人、ベトナム2人）
- 一時住まいの提供（計2人、ベトナム2人）



中国人留学生と食料品買い出し①



中国人留学生と食料品買い出し②



PHD事務所上階にて勉強するベトナム人留学生



PHD事務所上階のリビングにて交流

ここ長田から一歩ずつ

アウトリーチ活動の一番の財産は出会いです。在日外国人の方々は、留学、技能実習、結婚や就労など、皆それぞれが異なる事情や目的を持って日本で生活しています。その中には、苦しみや痛みを抱えながらも、誰にも言い出せずに日々を過ごす人も多くいると、この活動を通して知りました。彼らとつながっていく際も、支援ありきの一方的なアプローチでは距離は埋まらず、当事者の気持ちを傷つけることにもなりかねません。

ある留学生は、「私は日本に勉強と仕

事を頑張るために来ました。今はコロナで仕事を失って生活が大変になってしまいました。けれど自分の国じゃないのに、誰かにサポートを頼るのは恥ずかしいと思っていました。だから生活が苦しくてもギリギリまで耐えました。」と泣きそうになりながら訴えてきました。

それを聞いたとき、外国人として支援を求める声を挙げるということがどれだけハードルの高いことなのかを感じ、胸が締め付けられる思いでした。その後、支援という側面ではなく、関係性作りにも重きを置いたことで、その人の方から心を開いてよく話してくれるようになりま

した。この活動を通して、当事者ひとりひとりの思いに向き合うこと、そして、支援する側・される側の境界線を無くすことが、在日外国人の方々と本当の意味でつながる第一歩目になるのではないかと実感しました。

未曾有のコロナ禍、そして研修生不在という異例の一年において、このような新しい活動を実施できたのは日頃よりPHD協会を支えてくださる支援者の皆さまのおかげです。心より感謝申し上げます。

国際協力・交流シェアハウス「みんなのいえ」始動 山本 健太郎 = 文

6月の新事務所移転とともに、コロナ禍で困窮下にある在日外国人や難民の方々が一時滞在し、次の目標へ向かう一里塚となればという思いでシェアハウスをスタートさせた。今号では、10月に入居したベトナム人のお二人について紹介したい。



リン (Phan Phuc Linh) さん
21歳 ベトナム・タイホア出身

2018年に留学生として来日し、福岡の語学学校で日本語を勉強した。今年の3月に日本語学校を卒業し、帰国を予定していたがコロナ禍で帰ることができなかった。留学生ビザが期限切れとなり、特定活動ビザに切り替わる。

留学生ビザが失効し、行く当てもなくなったが、なんとか知り合いを頼って神戸の地へ。アウトリーチ活動で知り合った長田ベトナム仏教寺の住職ティックさんの紹介でPHD協会と繋がる。

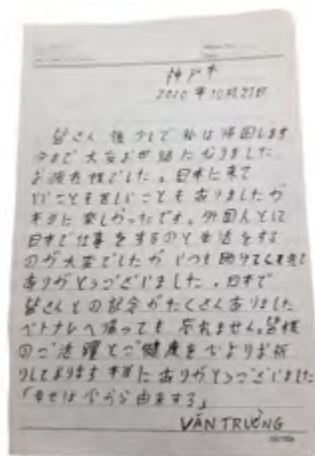
現在は日本の専門学校進学を目指し、勉学と仕事に励んでいる。普段は、物静かでマイペースに見だが、情にアツく涙もろい一面も。当会としても彼が自分で次の道を見つける一助となれば嬉しい。



チュオン (Dinh Van Truong) さん
27歳 ベトナム・ハイズオン出身

これまでの彼の経緯に関してはP3-4に記載の通り。4年間仕事や病気など大変な苦労を重ねてきたが、ようやく10月下旬に帰国の途につくことができた。辛い事の方が多かったと思うが、帰国直前に彼から受け取った手紙には感謝の言葉が綴られていた。

ずっとベトナムへ帰りたいかと思ったのだと思う。空港で別れ際の彼の笑顔は印象的だった。いつも誠実で、周囲への思いやりに溢れた好青年。彼の帰国後の未来が幸せに溢れていることを願うばかりである。



ネパール在住3年、カトマンズにて柔道などのスポーツ・教育サポートをしている古屋祐輔さんに、ロックダウン中の様子を寄稿いただきました。古屋さんにはドリット食糧支援の際に多大なご協力をいただきました。

大丈夫。あなたの声を頼りにして

古屋 祐輔 = 文・写真

視界が奪われるほどの暗闇では聴覚は強くなり、誰かの声は大きく聞こえるものだ。

ネパールのロックダウンはドブの底を這うような真っ暗な生活を強いられた。最初は2週間との知らせだったが、延長、延長で終息する気配がない。ロックダウンが3ヶ月もの長期に及んだときには、もう家の中で窒息死でもするのではないかというほど厳しいものになっていた。

ネパールのロックダウンというのは日本の緊急事態宣言よりも厳しいものだ。食料の買い物のための朝のわずかな時間以外に外出する事は許されず、警察に外出しているところを見つかり、怒声を浴びせられ、2時間立たされるという屈辱的な罰を受けなければならなかった。



政府へ反発している市民と警察の戦い
(古屋さんの友人による撮影)



長引くロックダウンや政府のずさんな対応にデモを起こしているネパールの若者たち
(ムグリンにて - カトマンズとポカラの間にある町)

そして、人の気配が消えた街では野良犬が領し、深夜の犬の遠吠えは鳴り止まなかった。

ロックダウンの最中には様々な声が聞こえた。

一番大きく聞こえたのは悲鳴に似た救いを求める声だ。ロックダウンが実施されると、ほとんどの人が収入源を断たれた。国からの保障もなく、困窮した人たちからの相談は私の元にも多数届いた。コロナに埋もれ苦しんでいる声は、ロックダウンの静寂の中で響き渡った。政府は国民の声を無視するかのよう過ぎるロックダウンは4ヶ月以上も続けた。

しかし、ネパールに滞在していて、ロックダウンで苦しむ声だけが聞こえたのではなかった。

未来を塞がれたような今だからこそ、近隣同士で乗り越えようと「助け合う声」というのも聞こえ出した。

日本では緊急事態宣言後すぐに「商品の買い占め」などの自分本位な生存競争があったと聞いたが、ネパールでは一切そんなことはなかった。



デモがあった翌日のカトマンズ市内



街中にある誰でも使える消毒タンク



わずかな外出可能時間に買い物をする人々
(厳しい時は朝6時~8時までの間)

ネパールで暮らしている外国人の自分を心配してか、近所の人たちが「食べ物はあるか?」とか「困っていることはないか?」と声をかけてくれたのだ。

「人間は一人では生きてはいけない」という言葉はよく使われる陳腐な言葉だけれど、このコロナの渦中のネパールはまさにそうだった。

ロックダウンの間に定期的に私に電話をし、いつも安否を確認してくれるネパール人の友人がいた。「いつも気にかけてくれてありがとう」そう伝えたら「ありがとう、なんて言葉はいらないよ、マイブラザー」と。

困った時にお金が助けてくれる事もあるだろう。しかし、困った時に本当に必要なのは、お金以上に人からかけてもらえる声だ。その声の数が多いほど、困難な状況を乗り越えられるように感じた。

日々是 東奔西走

研修担当
山本健太郎

『居場所づくりの 種を蒔く』

私たちに「今できること」を 模索して開始したアウトリーチ 活動。多くの外国人の方々との 出会いを通じて、彼らのリアル

な現実を垣間見ました。

帰国までの数日を PHD 協会で過ごしたベトナム人のチュオンさん (詳細と経緯は P3-4 参照) は、こう語っていました。

「日本では、本当に大変な思いをしてきました。まだここでいたい こと、行きたい場所もあります。でももう十分です。4年間であ かなり疲れてしまったから。今はただ安心してベトナムに帰って、 家族に会うことが望みです。」

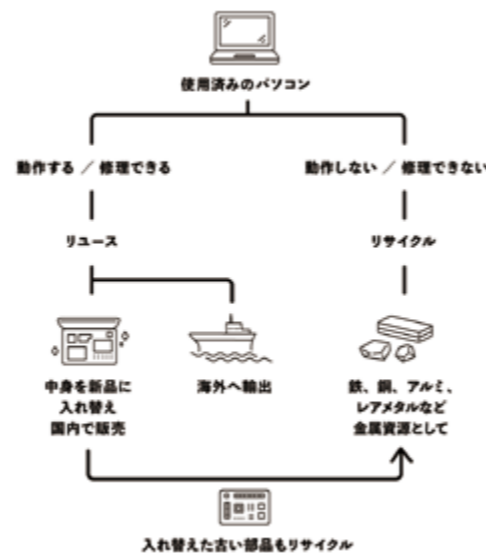
それを聞いたとき、彼がどれほど過酷な状況を潜り抜けて 今ここにいるか痛いほど伝わってきました。そして、チュ オンさんのようなケースが後を絶たないことも。彼らは日 本で目的や夢を持って生活しているだけなのに、どうして こんな辛い目に遭わなければならないのか。疑問を抱きつ



ベトナム人留学生のリンさん (左から2人目) とチュオンさん (左から3人目)

つ、これまでそれを直視してこなかった自分自身に対して、憤りを 覚えました。

今も情報や支援に手が届かない在日外国人の方々にはたくさんいま す。一人の人間として彼らと関わること、ひとりひとりの事情や価 値観を受け入れながら関係性を築くこと。単純かもしれませんが、 それが私の心掛けです。他人事で終わらせるのではなく自分事に。 PHD が彼らにとって安心して生活できる“居場所 (ホーム)”になる ことを願い、その種蒔きを続けようと思います。



【ピープルポート ZERO PC のパートナー団体】

当会は、ピープルポート株式会社が販売する再生パソコン ZERO PC (ゼロ・ピーシー) のパートナー団体となりました。11月2日(月)から12月31日(木)の期間中に ZERO PC をご購入いただくと売上の5%が指定したパートナー団体に寄付されます。

ZERO PC とは、廃棄されたパソコンを再利用し、使えなくなった部品までもすべて リサイクルする、環境負荷ゼロを目指す製品です。また ZERO PC の製造においては 日本在住の難民の方々を雇用し、彼らがパソコン再生技術を習得し日本で安心し て働けるよう支援を行っています。

パソコン購入を通した新しい社会貢献。ご関心がおありでしたら、ぜひ下記サイ ト「想う PROJECT- パソコンから想う世界」をご覧ください。

https://zeropc.jp/report/omou_project



PHD 活動紹介 2020年7月~2020年10月

- 7月
 - 1日 ワークショップ難民 (坂西)
 - 2日 「今こそ多文化共生を考える」セミナー第2回 (山本)
 - 3日 連合愛のカンパ 面談 (坂西)
 - 6日 神戸学院大学講義 (坂西)
 - 7日 JICA関西 協議 (坂西、中村)
 - 8日 NPO・NGO 草莽の集い2020 (坂西)
 - 2680地区RYLA広報委員会 (坂西)
 - 9日 アメリカンエクスプレス・リーダーシップ・アカデミー (坂西)
 - 「今こそ多文化共生を考える」セミナー第3回 (山本)
 - One World Festival For Youth 運営委員会 (坂西)
 - 10日 国際協力フォーラム (山本)
 - 13日 ASEAN HOUSE 協議 (坂西、山本)
 - 15日 多文化共生のための国際理解・開発教育セミナー実行委員会 (坂西、中村)
 - ワークショップ難民 (坂西)
 - 17日 ボーダレスジャパン「1人1人が主役の組織づくりセミナー」(山本)
 - NPO・NGO 草莽の集い2020 (坂西)
 - 18日 「国際協力の現場から」Vol.2 コロナ禍のミャンマーから (坂西)
 - 19日 ストップ! 長期収容~外国人の収容・送還について専門家が緊急開設~ (坂西)
 - 20日 京都SDGsラボ (坂西)
 - 22日 定例スタッフ会議 (坂西、山本、中村、中島)
 - アジア子どもプロジェクト 池田氏 来訪 (坂西)
 - 25日 Hello! ニューノーマルへみんなで支え合うポストコロナ社会~ (坂西)
 - 27日 JICA関西 事業マネジメント研修 (山本)
 - 28日 神戸NGO協議会 (坂西、中島)
 - 日本ベトナム友好協会兵庫県連合会 鳥本氏、長沼氏 来訪 (坂西、山本)
 - 30日 JICA関西と協議 (坂西)
 - ハチドリ電力 打合せ (坂西、山本)
 - HYOGON 勉強会 会議 (坂西)
 - 31日 第7回カフェ再開を目指して、一命をつないだ食糧支援 (坂西)
- 8月
 - 4日 国際理解教育・開発教育セミナー ~6日 (坂西、山本、中村、中島)
 - 5日 NGO/NPO/社会的企業のバワハラ勉強会 (坂西、中村)
 - 6日 職員研修 (坂西、山本、中村、中島)
 - 7日 NPO・NGO 草莽の集い2020 (坂西)
 - 2680地区RYLA広報委員会 (坂西)
 - 20日 京都SDGsラボ 座談会 (坂西)
 - 23日 セーフトラベルセミナー (坂西、中島)
 - 25日 JANIC 経営者情報交換会 企画委員会 (坂西)
 - One World Festival For Youth 実行委員会 (坂西)
 - 26日 神戸国際協力交流センター ヒアリング (坂西、山本)
 - フリーヘルプ 西本氏 来訪 (坂西、山本、中島)
 - 第3回NPOによるICT自慢大会ONLINE組織づくり、実践知共有、コロナ以後 (中島)
 - 28日 HYOMIC 幹事会 (坂西)
 - 31日 PLAS セミナー「withコロナ時代の国際協力NGOのあり方」(山本)
 - 定例スタッフ会議 (坂西、山本、中村、中島)
- 9月
 - 1日 アメリカンエクスプレス・リーダーシップ・アカデミー (坂西)
 - 2日 ハチドリ打ち合わせ (坂西、山本)
 - 3日 セーフトラベルセミナー (坂西、中島)
 - HYOGON 運営委員会 (坂西)
 - 4日 半期振り返りミーティング (坂西、山本、中村、中島)
 - 6日 HYOGON 情報交換会 (坂西)
 - 8日 たつのフィールドワーク (坂西、山本、中島)
 - NPO ことはじめセミナー~コロナ禍・ポストコロナのNGOとは~ (坂西)
 - 10日 アメリカンエクスプレス・リーダーシップ・アカデミー~11日 (坂西)
 - 11日 One World Festival For Youth ミーティング (中島)
 - 12日 国際ロータリー第2680地区RYLA 学友会総会、つどい (坂西)
- 14日 One World Festival For Youth 高校生実行委員会 (坂西、中島)
- With COVID-19における公益法人運営を考える (坂西)
- 職員面談~15日 (坂西)
- 15日 職員研修 (坂西、山本、中村、中島)
- JANIC 経営者企画会議 (坂西)
- 神戸市住宅課 来訪 (坂西、山本、中村)
- 16日 NPO・NGO 草莽の集い2020 (坂西)
- 17日 HYOMIC「多文化共生と国際協力」(坂西、山本、中島)
- 24日 アメリカンエクスプレス・リーダーシップ・アカデミー (坂西)
- One World Festival For Youth 実行委員会 (坂西)
- 25日 西大和学園高校オンライン講義: NGO 相談員 (坂西)
- 26日 オンライン講座ジャブラバ! (坂西)
- 28日 PHD 協会 理事会 (坂西、山本、中村、中島)
- 社会的事業のファンドレイジング-財団・社会的投資家の視点から- (坂西)
- 長田警察署・警備課 来訪 (坂西、山本)
- 29日 ビーブルポート 打ち合わせ (坂西、山本)
- 30日 定例スタッフ会議 (坂西、山本、中村、中島)

- 10月
 - 2日 SDG 大学 (坂西)
 - 神戸コア教育文化センター 金氏 来訪 (坂西、山本)
 - 3日 ハチドリ Talks 講演 (坂西、山本)
 - 5日 神港橋高校 橋タウンミーティング 講演: NGO 相談員 (坂西)
 - 6日 NGO 相談員 近畿ブロック会議 (坂西、中村)
 - 7日 関西学院高等部 講義: NGO 相談員 (坂西、中村)
 - 9日 ビーブルポート ミーティング (坂西、山本、中島)
 - JANIC・NGO 経営者情報交換会 企画委員会 (坂西)
 - 10日 英国・カナダから学ぶwithコロナのNPO・ソーシャルビジネス (坂西)
 - 12日 アメリカンエクスプレス・リーダーシップ・アカデミー (坂西)
 - 14日 篠山RC 卓話 (坂西)
 - 15日 HYOGON オンライン情報交流会 (坂西)
 - セーフトラベルセミナー (坂西、中島)
 - One World Festival For Youth ミーティング (中島)
 - 16日 NPO・NGO 草莽の集い2020 (坂西)
 - 18日 UNHCR「難民について伝えるスキルアップセミナー①」(山本)
 - 19日 職業紹介責任者講習 (坂西)
 - ラブリーンジャパン 相川氏・鈴木氏 来訪 (山本)
 - ハチドリ電力 小野氏 来訪 (古寺、山本、中島)
 - 20日 アーユス NGO 勉強会 (中島)
 - 自動車総運福祉カンパ 特別寄贈 贈呈式 (坂西)
 - 21日 JICA 関西 NGO 等提案提案型 会議 (坂西、山本、中村)
 - 2680地区RYLA 広報委員会 (坂西)
 - 22日 One World Festival For Youth 動画配信事前説明会 (坂西、中島)
 - 23日 JICA 企画キックオフ! (坂西、山本、中村、中島)
 - ganas グローバルライター 講座 (坂西)
 - 24日 ミャンマーの「今」を考える (山本)
 - 26日 神港橋高校 橋タウンミーティング 講演: NGO 相談員 (坂西)
 - 27日 京都滋徳高等学校 講演: NGO 相談員 (坂西、中島)
 - 兵庫区保健福祉部 福田氏 来訪 (山本)
 - 28日 アメリカンエクスプレス・リーダーシップ・アカデミー (坂西)
 - 「中小企業デジタル化応援事業」NPO 向け説明会 (中島)
 - セーフトラベルセミナー (坂西)
 - 29日 関西学院オンライン講義 (坂西)
 - JICA 責任ある外国人労働者受け入れプラットフォーム説明会 (坂西)
 - 大阪YMCA 評議員会 (坂西)
 - 30日 ganas グローバルライター 講座 (坂西)



PHD News

◆ 楽天銀行口座を開設

楽天銀行の口座を開設し、ネットバンキングでお振込いただけるようになりました。
楽天銀行口座をお持ちの場合は、口座間でのお振込が無料です。

銀行名（金融コード）	楽天銀行（0036）
口座名義	公益財団法人 PHD 協会
フリガナ	ザイ）ピーエイチディキョウカイ
口座番号	7022842
支店（支店番号）	第四営業支店（254）



◆ ベーシックガバナンス評価を更新

一般財団法人非営利組織評価センター（JCN E）による第三者組織評価（ベーシックガバナンスチェック）を受け、「すべての基準を満たしている」との評価を受けました。

この制度は、非営利組織の運営について、法令・定款に基づいた基本的なガバナンスが適切に行われているかを評価するもので、基準を満たした団体が「情報開示に積極的な透明性の高い団体」とされます。当会は2017年に初回の評価を受け、今回は3年後の更新のための評価でした。

私の身の回りの多文化共生 ○月×日のPHD協会

山本 研修生担当改め入居者担当。ベトナムの方と〇時に待ち合わせを約束するも現れたのは1時間後。余裕綽々と登場。研修生は遅れないのになあ。

中村 フィリピン人の夫と多文化共生の日々。が、違いが文化なのか、個人差なのか、男女差なのか、わからない。極意は「同じであることを期待しない」。

坂西 元研修生は時々連絡をくれる。ある時、「どうしたの?」と返事をしたら「何もないけど、ポストが時々あいさつしてくれないからですよ」と叱られる...

中島 民泊経営者でもある中島。海外からの宿泊者をお気に入りの立呑みに連れていくことも。が、異文化度では角打ちおっちゃん文化の方が上らしい。

濱 研修生からママと呼ばれ、慕われる濱。多文化共生を超えて融合の段階に。今や焼き飯とナシゴレンの違いも曖昧に。終の棲家は研修生の村か?

今冬を越えられるか!? 上から、寒がりの順。

◆ Youtube「草の根」チャンネル始動

12月1日より、Youtubeでの動画配信をスタート！元研修生たちからのビデオレター、各国の村のバーチャルツアー、お料理教室など、オンラインならではの、どこでも楽しめるPHD動画をお届けします。



https://www.youtube.com/channel/UCsm7179m0m_m_3HPUqbFwW0w



2021年 PHD協会は創立40周年